

公教育からみるインドのセキュラリズム

——歴史教科書の検討——

澤田 彰 宏

近代国民国家における政教関係であるセキュラリズムは西欧起源の概念であるが、現在多くの国々で採用されるにあたり、それぞれの国家の歴史と文化が反映されることで、その内実は全く同一のものではなくなっている。インドでは、イギリス支配からの独立時からセキュラリズムは国是であるが、一九九八年にはヒンドゥー・ナショナリズム勢力の政党(インド人民党)が政権をとっている。その影響はさまざまに現れ、国立機関発行の歴史教科書への介入もそのひとつであった。しかし二〇〇四年には、独立以来セキュラリズムを党是とするインド国民会議派が政権に返り咲き、歴史教科書も新たなものが出版された。本発表では、この二つの時期の歴史教科書を比較検討することにより、セキュラリズムとコミュナリズム(宗派主義)の対立においてインド史としては何が争点となるのかを探り、そこから教育されるべきインドのセキュラリズムとはどのようなものであるかを考察する。

インド人民党政権時の歴史教科書(Aとする)には、ヒンドゥー・ナショナリズム勢力が主張する歴史観がある程度反映されている。それは、インダス文明期さらにはそれ以前にもさかのぼるヒンドゥー教の伝統、古代に実現していた理想的社会、中世のイスラーム勢力はどのような社会を破壊する侵略者、などである。さらに、近代の植民地期は独立へのインド人の闘争

の歴史であり、ガンディーの非暴力運動だけでなく武力闘争への評価も伺え、印パ分離独立の原因はあくまでムスリムが分離主義者であったため、などである。その一方、現実のヒンドゥー社会に内在している問題であるカースト差別や女性差別などの問題は教科書では触れられず、読者には見えないものとなっている。

インド国民会議派政権時に出版された教科書(Bとする)では、Aのように政治的事項を中心に直線的に叙述するスタイルをとらず、多少の年代の前後があっても、テーマ別の章立てとすることで(例えば「織、鉄精錬工、工場主」という章や、マインリテイであるトライブについて一章をあてるなど)、それぞれの問題を多面的にみるような叙述を試みている。その上でAでのヒンドゥー教至上主義的な方向から歴史を引き戻そうとしている。それは例えば、古代にはカースト(ヴァルナ)制をバラモン階層が構築したが、それに対しては反発もあったこと、中世にカースト(ジャーティ)が成立してきたこと、イスラーム勢力による略奪破壊の事実はあるが宗教的侵略が目的ではないこと、近代では、ムスリム連盟は単なる分離主義者ではなく、独立に至る現実の政治過程でみずからの要求実現のためパキスタン建国に至ったことなどである。さらには、カーストや女性問題ではヒンドゥー教内部からも改革運動があったことなどが詳述される。重要なのは、政治的問題に関わる点については言及を避け(アーリヤ人のインド進出の時期、アヨールディヤーのモスク、ガンディー暗殺者の党派)、ヒンドゥー・ナショナリズムを直接批判するような記述をせず、また宗教コミュ

ニティ間での優劣をつけるような書き方はしないなど、（ヒンドゥー教の社会問題には厳しいが）叙述において価値的序列化を避けていることである。

教科書の検討からは、インドでセキュラリズムを実現するための歴史教科書のあり方とは、インド社会・文化ではヒンドゥー教伝統のみが正統なのではなく多種多様な宗教や生活習慣をもつ人々が存在し、せめぎあいもあってもそれぞれの立場や理由があることを示し、優劣化や批判は避け、中立を保つためにはあえて言及もしないという方法もとることがわかる。つまり、インドでは宗教の公的領域からの排除ではなく、諸宗教を多面的視点で見て、それぞれを等価値の存在であるとするセキュラリズムが要請されているのである。

ケベックの「倫理・宗教文化」教育における 「宗教」の位置

伊達 聖伸

カナダのケベック州では、一九六〇年代の「静かな革命」以降の大きな社会変動のなかで、宗教のあり方が変わってきた。州政府、教会、家庭の関係が再編されるなか、学校教育の役割も変化してきた。一九八〇年代には、カトリックとプロテスタントの宗派教育の選択制に、非宗教的な道徳教育が加わり、二〇〇〇年前後からは、ライシテに基づく統一科目としての宗教文化教育のあり方が模索されてきた。そして、二〇〇八年の新

学期からは、ケベックのすべての小中学校で「倫理・宗教文化」の授業が必修となっている。

「ライシテ」はしばしばフランス独特の厳格な政教分離と考えられているが、ケベックのライシテはフランスのそれとは趣を異にし、公共空間における宗教を積極的に承認する用意があるし、学校教育のなかでも宗教を文化として教えようとしている。またそれは、倫理という規範性ともリンクしている。

本発表では、倫理や宗教という価値にまつわる主題が、教科書でいかに扱われているのかを分析する。とりわけ、輪郭を確定することが非常に困難な宗教という現象が、どのような形でとらえられているのかという点に注意を払う。倫理や宗教の扱われ方は、従来の「道徳・宗教」の教科書とどう異なっているのだろうか。そこには、断絶だけでなく、一定の（逆説的な）連続性もあるのだろうか。

たとえば有名な「よきサマリヤ人」のエピソードが、カトリックの教科書と倫理・宗教文化の教科書でどのように取り上げられているかを比べてみよう。前者においては、明示的な規範性が打ち出されているが、後者の叙述は、説明的な地平に留まっている。それでも、生徒がそこから行動指針を引き出していることができる可能性は残されている。

「宗教」と「スピリチュアリティ」の関係も興味深い。先住民の宗教的実践は、近代西洋的な「宗教」概念に馴染みにくいなか、しばしば「スピリチュアリティ」と称される。それを「宗教」に組み込む傾向と、「宗教」から区別しようとする傾向が、教科書には見られるのである。このような「スピリチュア